Movie Review　26　#アパートの鍵貸します

『#アパートの鍵貸します（The Apartment)』(1960年、ビリー・ワイルダー監督）をNHKBSで視聴した。出演はジャック・レモンとシャリー・マクレーン。第33回アカデミー賞で作品賞、監督賞など5部門受賞した。

4人の上役にアパートの部屋を情事の場に提供する独身サラリーマンB。出世の糸口とするため、残業して時間を潰す悲哀を描いている。米国のこの頃の上級サラリーマンは、皆不倫をしていて、円満な家庭生活と愛人と過ごす二重生活が当たり前だったのだろうか。

ニューヨークの保険会社に勤めるBは、昇進のために、4人の部課長に対して、それぞれの愛人との密会用に自分のアパートの部屋を提供し、毎夜残業して遅く帰る生活をしていた。ある日、S人事部長に呼び出され、彼にも部屋を貸すことになる。それまでの「貢献」が認められて平社員から課長補佐に昇進し、個室も与えられたBは会社のエレベーター係（時代を感じさせる。こんな職業があったのだ。バスの車掌さんも居なくなった。）のFをデートに誘うが、実は彼女はSの愛人で、Bとの映画鑑賞の約束をすっぽかしてしまう。
クリスマス・イヴの会社でのパーティで、FはSの秘書から彼の女性遍歴を聞かされて落ち込む。また、BはふとしたことからFがSの愛人であることに気付き、ショックを受ける（割れた手鏡が小道具として使われている)。Sに部屋を貸したBはバーで閉店まで時間をつぶす。Bのアパートでは、Sと別れ話になったFが、その後、浴室にあったBの睡眠薬を飲んで自殺を図る。帰宅したBはベッドで眠っているFを見つけると、隣の部屋に住む医師を呼んで介抱する。Fが帰宅しないのを心配した義兄が、会社でFの滞在先を聞き出してアパートへ向かい、そこで義兄にBがFの自殺未遂の原因と誤解されて殴られる。翌週、出社したBは、SにFを引き取ると持ち掛けようとするが、Sは自分が解雇した秘書が自分の妻にそれまでの多彩な女性関係をバラしたことから離婚することになったと打ち明け、Bを更に便利に使おうと、転勤した人事部長補佐の後任にBをさらに昇進させる。大晦日、社交クラブに泊まっていたSはFと過ごすため、Bにアパートの鍵を要求するが、Bは要求をはねつけて会社を退職し、アパートから引っ越す準備を始める。
年明けをレストランのパーティで迎えたFは、SからBが会社を辞めたと聞き、彼の気持ちにようやく気付くと、彼のアパートに急ぐ。1人でシャンパンを開けていたBのもとにFがやって来る。Bは街を出るつもりであると語り、Fに愛を告白する。Fはそれに答えず、Bにトランプを配り、ゲームをしようと言って映

画は幕を閉じる。

本作では小道具が活躍する。開けると、ひび割れた手鏡。キッチンに置かれたテニスラケット。スパゲッティをゆでる際、ザルの代わりに湯を切るのに使う。シャンペーンの蓋を開ける銃声のような音（ドアの外から聞いて自殺と勘違い)。

私が得た教訓：古い何かを捨てなければ、新しいモノは得られない。
映画はその時代の場所の文化を映し出す。